



夏の終わりに「みなとしまち川祭り2019」

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.47

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.47

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	みなとびあの民具の収集	P.2~3
特集2	むかしのくらし展 布とむかしのくらし	P.4
歴史さんぽ	礎公園(白勢家新潟別邸跡)	P.5
おすすめの1冊	「気候で読み解く日本の歴史—異常気象との攻防—四〇〇年」	P.5
研究notes(第34回)	絵師俊明は関西にいたか	P.6
館長日記	古町	P.7
収蔵資料紹介	佐渡汽船商事 津野務 著 一九六六「観光にいがた」	P.7
博物館 あちらこち	「千の風になって」のふるさとモニュメント・白い羽のポスト	P.8

帆檣成林「はんしょうせいりん」vol.47号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社ウエザップ

【たいげんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
9月15日 ①13:00~14:30 ②15:00~16:30	こども歴史クラブ 「開港場にいがためくり」	明治時代の写真と見比べながら、新潟の町をめぐります。	部員が対象 2部制で実施
9月21日 土	みなとびあもめん部	博物館資料を使いながら、布生産にまつわる手仕事を体験する試みです。	大人向けの活動・部員が対象
9月28日 土	みなとびあワラ部	ワラゾウりのつくり方を教えあいます。初心者の方もどうぞ。	大人向けの活動・部員が対象
9月28日・29日 日	洗濯板とひのしをつかってみよう	むかしのくらし展に関連して、布にまつわる暮らしの道具を使ってみます。	当日先着10人(各日)・申込み不要・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在 開催中の企画展

第16回むかしのくらし展「布とむかしのくらし」

一本の線の糸を編む・織る技術によって面の布とし、古くから衣類をはじめ生活の必需品として布を役立ててきました。本展では新潟県の編み物・織り物の歴史に触れながら、衣にかかわるむかしの道具を紹介します。

会期 2019年9月14日(土)~12月8日(日)
休館日 毎週月曜日(※9月16日、23日、10月14日、11月4日は開館)、9月17日、24日、10月15日、11月5日
観覧料 無料 ※常設展の観覧は有料です
主催 新潟市歴史博物館 **後援** 新潟市教育委員会

- 関連事業**
- 洗濯板とひのしを使ってみよう
日時：9月28日(土)・29日(日) 午後2時から3時
会場：1階たいげんの広場
参加費：無料
※定員10名・先着順・事前申込み不要
 - しぼり染め体験
日時：10月6日(日) 午後1時から4時
会場：1階たいげんの広場
参加費：500円
※定員15名・要申込み(9月21日出願のみ)・応募多数の場合は抽選
 - かんたん!布のコースター作り
日時：11月30日(土)・12月1日(日) 午後2時から3時30分
会場：1階たいげんの広場
参加費：無料
※定員15名・先着順・事前申込み不要

お申込みの場合は、メールかFAXでイベント名・氏名・住所・電話番号を明記し、博物館まで

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

- 【時間】** 13:30~15:00
【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 不要 (当日受付・定員80人程度)
【資料代】 100円
- ◆9月の講座：9月22日(日)
「北前船寄港地比べ 一酒田・新潟・三国の歴史と今」
講師：小林降幸
 - ◆10月の講座：10月27日(日)
「新潟市のお菓子・小史」
講師：森行人
 - ◆11月の講座：11月24日(日)
「絵図に見る新潟ゆかりの文人」
講師：中村里那

次回 企画展

「地図と古写真で見る“新潟の文明開化”」展

明治元年の新潟開港は、それまで商業中心だった港町新潟を、新潟県政をも担う町へとその性格を変えました。開港後の近代化の中で町がどのように移り変わってきたのか、その様子を地図と古写真によって視覚的にたどります。



【会期】 2019年12月21日(土)~2020年2月2日(日)
【休館日】 毎週月曜日(1月13日は開館)、12月28日~2020年1月3日、1月14日は開館

博物館 あちらこち

「千の風になって」のふるさとモニュメント・白い羽のポスト

みなとさがの一角に石造りのモニュメントがあります。新潟市のプロジェクト「千の風のふるさと・新潟市」の取り組みにより2016年に建立されました。



楽曲「千の風になって」にゆかりのある愛媛県西条市と北海道七飯町でも楽曲にまつわる取り組みが行われており、西条市では、毎年、亡き大切な人への想いを綴った手紙を広く募集する事業を主催しています。



手紙の募集期間には事業のシンボルでもある応募用ポストがみなとびあにも設置されます。今年は9月2日まで設置されました。翼を携えた白いポストはアート作品のようでもあります。来年も白いポストがみなとびあに夏の訪れを告げてくれることでしょう。

編集 後記 今回は、民具の収集について特集しました。改めて民具が地域の生活文化の特徴を伝えてくれる重要な資料であることを確認できたのではないかと思います。新潟市内の各区の資料館や博物館でも、民具を扱う展覧会を多く開催しています。新潟市内の資料館・博物館で行われる展覧会やイベントのスケジュールを3か月ごとにまとめていますので、本館のホームページなどであわせてチェックしてみてください。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel：025-225-6111 Fax：025-225-6130
E-mail：museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】 (4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



2019. 6. 25 現在

みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、開港150周年を迎えた新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NISSAN 日和山五合目 **北陸ガス** **NSGグループ** **humming TOUR**
本間組 **田中屋本店** **堀川** **新潟「にいがた」**

みなとぴあの民具の収集

森 行人

前号に続いて、民具の収集について紹介します。みなとぴあでは、むかしのくらし展「布とむかしのくらし」を九月十四日から開催します。むかしのくらし展は開館以来毎年開催している企画展シリーズで、今年で十六回を数えます。民具を中心とした企画展で、地域の生活文化を伝えることを目的とします。小学校社会科には、地域のむかしのくらしを学ぶ単元があるため、多くの小学校が見学に来てくれます。一般の来館者をあわせると、毎年七千人から一万人の観覧者があるシリーズになっています。本展では、亀田編や葛塚編、小須戸編など、各在郷町を中心に発展した綿織物業やその関連産業を紹介するため、当館が収集した紡織関係の民具だけでなく、各区で保存されている民具を借用して展示しています。

民具は地域が育んだ生活文化を伝える上で欠かせない資料です。当館のほか、今回資料をお借りした江南区郷土資料館、北区郷土博物館をはじめ、市内の様々な施設では、それぞれの地域で使われた民具を保存しています。ところが、たくさん集めてきた民具は形が一定でない上にかさばるものも多く、多くの収納スペースを必要とします。当館や他の多くの施設でも収納スペースがいっぱいになってきていま

す。民具には生活に関わる多様な物品が含まれ、多くは日々のくらしや仕事に使われた道具です。実用品は実用性を失えば無用の存在になります。多くは廃棄され、民具として集められ保存されているのはごく一部です。

そうだとすると民具を集める理由があります。それは、単になつかしさや希少性にあるわけではありません。(公財)日本博物館協会刊行『博物館研究』に民具の特集号(通巻五七八号)があります。ここでは、個人や研究機関、自治体、博物館・資料館など様々な主体が民具を集めてきたことふれ、その収集の動機について、①文化財保護や学術目的の体系的・継続的収集保存、②昭和四十三(一九六八)年の明治百年記念事業前後から、一種のブームとなった博物館・資料館の建設を契機とする収集保存、③昭和四十五(一九七〇)年の大阪万博前後の民俗ブームに促された収集保存、④昭和四十五年の「減反政策」への転換と、ほぼ同時期に進行した稲作への農業機械の導入により、役割を終えた古い農機具、生活用具の収集保存、と整理しています。また近年は、文化振興や地域活性化の一環として民具の収集事業が行われているとします。(岩野邦康二〇一六「どこまで、いつまで―民具の収集保存、継承の現状と課題―」前掲書)。

昭和四十年代は高度経済成長期の後半にあたり、くらしや社会・経済が大きく変化したことが、人々にも実感された時期であったと思います。収集の契機は一樣ではありませんが、民具の収集によって以前のくらしの在り様が後世に伝えられました。

何を民具として収集するのか、それを何を伝えるのか、民具の収集の対象と目的を当館の事業から具体的に紹介します。当館は昭和四十七(一九七二)年開館の新潟市郷土資料館が収集した民具を継承し、現在も民具を収集しています。まず、収集の対象に関して、文化庁の有形民俗文化財の考え方も参考にし、左記の方針で臨んでいます。時代あるいは地域の生活様式の特徴を示し、その変遷を把握・提示できる生活全般に関わるもの、また手工業等の職能の様相を示すもの、劇的に生活の変化をもたらしたものの、明確な流行を示したものと、これらを資料として収集します。民具が使われる場所や状況のまとめ、一連の作業工程などを示すことができるよう、できるだけ体系的な、群としての収集に努めています。

次に目的について、特に力を入れて収集している低湿地の生産活動に関する民具を例に述べます。ご存知の通り、近代以前の新潟市域は大小の潟が

点在し、水害の頻発する土地でした。地域の主産業である稲作は、その多くが湿田でした。農業をはじめ、低湿地での生産活動を通じて特色ある技術が蓄積されました。船を使った農作業の写真を見たという方も多いでしょう。

しかし、低湿地の生産技術を具体的に知るための手がかりは意外に多くありません。そこで重要になるのが民具です。当館や市域各区の博物館・資料館等には乾田化以前の農業や生産活動の道具が収められています。平成二十四年度企画展「開墾の技術史 蒲原平野のたんぼとたけ」では、蒲原平野という沖積平野に広がっていた低湿地に、水田を開墾してきた歴史や技術を紹介しました。展示の中で、蒲原平野の各地域の開墾具・耕作具を比較しました(写真1)。



写真1 開墾の技術史展の民具の比較

特徴的なのが大型の鎌(写真2)です。この鎌はヤチキリガマ、イボキリガマ等と呼ばれます。ヤチと呼ばれるヨシの繁茂する湿地では、地下にヨシの根茎が層を成します。これら大型の鎌は、ヨシの根茎層を切断・除去するために使われたものです。興味深いのは、この大鎌の分布や呼称には蒲原平野の中でも違いが見られる点です。

例えば、北蒲原の平野部に立地する新発田市では、ブタキリガマと呼ばれる鎌を所蔵しています。これは福島潟北東部で使われたものです。福島潟周辺の阿賀野市や新潟市北区でもブタキリガマを所蔵しています。亀田郷の各区の博物館・資料館には、同種の大鎌が多く残されています。ここでは北蒲原郡と異なり、ヤチキリガマ等と呼ばれます。西蒲原の旧鏡潟以北は田潟・大潟・鏡潟という大きな潟があったことから三潟地方とも呼ばれます。現在西区・西蒲区・南区に含まれるこの地域でも同種の鎌が残されています。一方、鏡潟以南の上郷と呼ばれる地域や新津郷・白根郷では、この種の大鎌は残されていません。

実は、これらの大鎌は、水田の開墾に使わ



写真2 開墾用の大型の鎌

れたものです。開墾という潟の干拓工事のような大規模なものが想像されますが、個々の村や家単位で行われる小規模な開墾もあります。ヨシが繁茂するヤチは、こうした小規模な開墾の対象になりました。それを可能にしたのは低湿地の多い当地ならではの、ヤチの根茎を除去し、川や潟の底の堆積物を客土して水田を拓く技術でした。

開墾用の大鎌の分布については収集段階の事情も考慮する必要がありますが、地域的な傾向が見られることには理由がありそうです。企画展では、標高等の地理的要因、開墾の進展等社会的条件が異なることで、蒲原平野の中でも開墾に用いられた道具の伝世状況に差異が生じたことになりました。

次は全国的な視点で、低湿地の民具を考えてみます。魚を捕らえる漁撈具の一つに筥があります。竹や柳の枝などで編んだ籠状の道具で、ウケやドウ、モジリ等と呼ばれて北海道から沖縄まで全国各地で様々な形状のものが使われました。蒲原平野ではドウとかツツなどと呼ばれ、フナやナマス、コイヤヤツメウナギなどを捕らえる大型のものもあります。中でもドジョウを捕る筥はドジョウツツやタツベなどと呼ばれ、平野部の農村で広く使われていました(写真3)。かつて水田や用排水路にはドジョウが生息し、農家では稲作作業の傍らドジョウ捕りの筥を設置・回収、食生活や現金収入の足しにしていました。個々の家単位では生業という規模には至らない活動です



写真3 ドジョウを捕る筥

が、多数の農家が行うため蒲原平野部全体では特産品として県外市場に出すほどの漁獲量となりました。

水田稲作と淡水漁撈が深く関わっていることを論じた安室知さんは、水田という場が漁撈や狩猟、畑作を取り込んで稲作と並行して様々な生計活動を複合させていたと指摘し、特に水田周辺で継続的に繰り返すことが可能な漁撈を「水田漁撈」として捉えました(安室知二〇〇五『水田漁撈の研究 稲作と漁撈の複合生業論』)。水田及びその周辺でのドジョウ捕りは、蒲原平野部の低湿地の特色ある生活文化の一つです。同時に水田周辺でのドジョウ捕りは、水田耕作に伴って全国的に見られる生活文化でもあります。

これらの例が示すように、民具は地域で営まれてきた日々のくらしにおける、一つ一つの行為と、それらが各地に

どのように分布するのかわかりません。日常の営為は、その当時には自明のことであっても、時間の経過と共にわからなくなってしまうものです。社会の在り様が大きく変化した以前の生活文化を問い直すのは、さらに困難ですが、その手がかりとなるのが民具です。一つの地域の民具を丹念に収集し、それを出発点に、同種近縁の民具分布を地域的な範囲や時系列などの視点から比較することで、生活文化の分布の広がりや変遷が明らかになり、その普遍性や独自性を知らることができそうです。国の重要有形民俗文化財の中には、地域で営まれてきた生活・生業に関わる民具類を網羅し、それによって地域性やその特色を位置付けた資料群があります(例えば二〇一七年指定「砺波の生活・生産用具」六九〇〇点)。民具の収集と比較の重要性を教えてください。

当館でも、民具を新潟市域の生活文化を伝える資料として位置付け、収納スペースにも限りがある中で、収納の効率化を図りながら、可能な範囲で保存・収集・活用することを使命と考えています。

(もり ゆきひと 学芸員)

みなとびあでは毎年小学校の単元に
合わせて「むかしのくらし展」を開催
しています。十六回目にあたる今回は
「布とむかしのくらし」をテーマとし
ています。新潟市ゆかりの布のほか、
タンスなど布に関わる昭和三十年代く
らいの道具などを展示します。

布の歴史について、現市域では古い
時代の詳しいことはわかりません。県
全体の歴史をみると麻織物や絹織物が
中世以前から生産されていました。江
戸時代には現市域でも、綿や絹織物の
生産が行われるようになります。幕末
の元治元（一八六四）年刊行の『越後
土産』という本には大野や新飯田のワ
タのような布の材料、亀田綿のような
縞木綿の布、白根絞りのような染め物
の布などが現市域の名物としてみられ
ます。明治時代以降には、日本国内の
流通が盛んになり、材料が他地域から
移入されたり、製品が移出されたりす
るようになるなど現市域の布を取り巻
く環境は変化しつつ、発展していきま
す。しかし、布関係の産業は、戦争や
戦後の生活スタイルの変化などにより
多くが衰退しました。新潟市は布や材
料の産地としての歴史もあり、それを

物語る道具が少なからず残されている
のです。

一つ目のコーナーでは、布の生産に
関わる道具を紹介します。布の代表的
な材料と織物として、木綿を材料とす
る綿織物、からむしなどを材料とする
麻織物、生糸を原料とする絹織物と、
それらの生産に使われたワタキリや麻
引き台などの道具を紹介します。布を
触ることのできるコーナーも設けてい
ますので、それぞれの感触も確かめて
みてください。

二つ目のコーナーでは、洗濯や修繕
など布を使っていくための道具を紹介
します。いま私たちが使っている洗濯
機や電動ミシンは昭和三十年代以降に
広まりますが、それ以前は洗濯板を使



洗濯板とたらい

い手で汚れを落としたり、足で踏み板
を踏んで動かすミシンが使われたりし
ていました。今の生活の便利さを考え
させられるコーナーになっています。
三つ目のコーナーでは、新潟市域を
中心に地元の布を紹介します。亀田綿
など木綿を材料にした綿織物や染め物
の白根絞りは、江戸時代に歴史がさか
のぼる地元の布です。一部は今も商品
としての生産、あるいは技術の伝承が
続けられています。これらの実物や、
白根絞りの製作過程の映像などを展示
しています。

四つ目のコーナーでは、昭和三十年
代以降のくらしと布との関わりを紹介
します。布は衣類以外にも様々な形で
私たちの生活の中で使われています。
むかしの布の使い方には、昔と今で少
し異なるものもあります。例えば、電
化製品が貴重だった時代には、テレビ
や電話のような電化製品に布をかけて
保護することもありました。くらしの
中での布の役割や、布に関わる道具の
変化を知ることのできるコーナーと
なっています。

「布とむかしのくらし」展では、新
潟市でつくられた地域の布をみるこ
とができます。また、子どもたちには目



黒電話と布カバー

新しく、おじいさん・おばあさんの世
代にはなつかしい道具を紹介します。
新潟市を知り、また家族で楽しめる展
示となっていますので、是非ご覧いた
だければと思います。
(たじまゆうすけ 学芸員)

歴史さんぽ

礎公園(白勢家新潟別邸跡)

新潟市中央区礎町通

みなとびあから信濃川上流に向かって川縁を10
分ほど歩くと、柳都大橋に差し掛かります。柳都大
橋の手前では、川に面して建つ新潟テレビ21 (UX)
の社屋が視界に入ります。ここは昭和56 (1981) 年
まで佐渡汽船のターミナルがあった場所です。ここ
から佐渡に向けてフェリーやジェットフォイルが就
航していましたが、フェリーの大型化などで手狭に
なったため、対岸の万代島へ移転しました。

さて、この新潟テレビ21社屋の川側を正面にし
た裏手に公園があります。脇に柳都大橋が開通し
たため、その陰に隠れるようにひっそりしていま
す。この公園が白山公園に次いで新潟市内2番目
に開園した礎公園です。大正13 (1924) 年、裕仁
皇太子 (昭和天皇) のご成婚を記念して建設され
ました。公園にはそれを示す標柱が立っています。
また他の標柱には「明治天皇新潟行在所」と
記されたものもあります。

明治11 (1878) 年、明治天皇は北陸巡幸で新潟
町を訪問されました。この公園には明治天皇が新
潟訪問中に滞在した白勢家の邸宅があったのです。
9月16日に新潟入りした天皇は19日の朝に新潟を
発つまで、ここを拠点に新潟町内を視察しました。

白勢家は北蒲原郡の大地主の家系で、新潟の三
大財閥の一つにも数えられています。行在所とな
った邸宅は白勢成熙が建設を進めていた新潟の別邸
で、行在所に決まるやいなや予定を早めて工事を
進めたとのこと。工事費は4万5千円。この
後、明治19年に建設された萬代橋の工事費3万6百
円を上回っていることから、贅を凝らした大邸宅
であったと想像されます。明治天皇は2階建て建物
の1階を御座所とし、その2階を御休息所とされま
した。その前には池があり、500匹もの鯉が放され
たその池で天皇は釣りを楽しまれたとのこと。

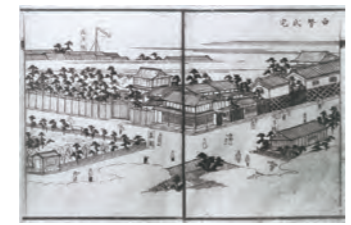
当時、新潟テレビ21社屋あたりはまだ信濃川
の中でした。新潟での視察を終えた一行は白勢邸裏
手のこのあたりから信濃川を舟で渡りました。奇
しくも明治天皇が舟で発った場所が、後に佐渡汽
船の発着場になったのです。

みなとびあの見学ついでに、礎公園を訪ねてみ
ませんか。

小林 隆幸 (こばやし たかゆき 副館長)



礎公園：裏手に見える
アンテナのある建物が新潟テレビ21



白勢家新潟別邸の図：邸宅前の左右の道が礎町通
(中野財団「明治天皇聖蹟誌」1924年)



白勢家新潟別邸 (当館蔵)

おすすめの1冊

気候で読み解く日本の歴史 —異常気象との攻防二四〇〇年—

太陽活動と火山活動の活発化は、地球規模
で気候の温暖化や寒暖化をもたらす大きな要
因として、度々天候不順や異常気象といった気
象災害をもたらしてきました。本書では、この
ような気候変動に対し、日本ではどのように立
ち向かってきたかを通史的に紹介しています。
全体を通して印象的なのは、気候変動が日
本史の転換に大きな影響を与えていたという
点です。本書では、教科書でも紹介されてい
る遷都や各政権の盛行・衰退といった歴史上の出
来事を気候の変動と照らし合わせながら解説
しており、通常とは異なる視点で歴史を学ぶこ
とができます。また、最新の科学データに加
え、古い日記に残された桜の開花日や天候の
記述をもとに、当時の気候を分析している部
分も興味深いところです。気候変動への対応策
についても、灌漑技術や農具の発展、各政権の
政策などを詳しく解説しています。
気候学についても詳しく学ぶことができ、ま
た今後の気候変動への向き合い方についても
考えさせられる一冊です。

(鈴木 彩也花 学芸員)



田家康
日本経済新聞出版社
2013年7月

絵師俊明は関西にいたか

五十嵐俊明(一七〇〇〜八一)は江戸中期の絵師です。新潟に生まれ、三十歳のとき江戸で絵を学んだ後、京都で絵師の位「法眼」を授かり延享元(一七四四)年に四十五歳で帰郷しました。新潟に居を構え多くの後進を育てた俊明ですが、帰郷後の作品が関西に現存するほか、関西で出版された絵師番付にも名が挙がっています。仲介者がいたのか、俊明自身はるはるはる関西まで赴いたのでしょうか。

京都相国寺の禅僧大典(一七一九〜一八〇二)の漢詩集『小雲樓稿』に、「俊明」が登場するのを発見しました。大典は、京都の絵師伊藤若冲のパトロンとしても知られ、漢詩作りが大好きな文化人でもあります。そんな彼はしばしば大坂の「混沌社」という漢詩創作グループに入り浸るのですが、ある大坂滞在時、混沌社メンバーの「俊明」が訪ねてきたので漢詩を作って贈ったといい、その詩が本書に収められました。この「俊明」が、新潟の五十嵐俊明である可能性が高いのです。

混沌社の中心である片山北海(一七二三〜九〇)は、新潟出身で俊明没後の翌年にその墓誌銘を作文した人物。この銘文は現在俊明の伝記のもととなっています。北海は京都へ出て元文五(一七四〇)年

に儒学者の宇野明霞に弟子入りしますが、俊明も明霞とは交友がありました。明霞没後に編集された『明霞先生遺稿』には帰郷する俊明へ贈った詩が掲載されています。そして、これを編集したのは大典です。大典もまた、北海とともに明霞に儒学を学んでおり、二人は兄弟弟子でした。延享二(一七四五)年に明霞が没すると、北海は支援者の招きで大坂へ移り、やがて大坂の文化人たちに慕われて混沌社の中心的存在になりました。大典、北海、俊明は旧知の仲だったといえます。五十嵐俊明以外に妥当な「俊明」は、当時の大坂・京都の人名録には見当たりません。

さて、『小雲樓稿』では大典の作詩が詩の形式ごとにまとめられ、それぞれ年代順に並べられているようです。俊明への詩の前後を確認すると、それが明和二(一七六五)年に詠まれたことがわかりました。俊明が明和二年に大坂にいたことになりました。それは、面白いことにいくつかの事実と関連してきます。

一つは、絵師番付『古今丹青競』に「明和 呉俊明」と記載され、活躍期が明和とされていること(「呉」は六十代に俊明が名乗った姓です)。もう一つは、当館所蔵の画稿(「下絵」

「孔明図」「張飛図」に、明和二年(俊明十六歳)に「松前侯」の求めに応じて描いたと記されていることです。京都では松前藩の分家筋にあたる松前順広が、一七五六〜六四年に西町奉行を務めていました。彼を介して、関西に滞在していた俊明に絵が注文された可能性が出てきました。

明和二年には、俊明は関西に滞在して仕事を受注し名を高めていたと考えられます。また同時に、絵師としてだけでなく、漢詩をたしなむ文化人としての付き合いもありました。そのネットワークがさらなる仕事の縁となったかもしれません。

しかし、俊明はあくまで新潟を拠点としていました。作品の落款に使用さ

れた印章には「越人」と刻まれたものがあり、「越人」・「俊明」の組み合わせが作品の中でもっとも多く見られます。

藩などのお抱え絵師となることなく、自らの力で文化の中心地である関西へ挑み、その地の文化人たちと対等に交流した俊明。いまだ謎も多く、魅力の尽きない新潟の絵師です。

(なかむらさとな 学芸員)



画稿「張飛図」(部分) 五十嵐俊明 明和2(1765)年 当館蔵

古町

私は、就学直前に脳膜炎になりかけたとかで、小学三年くらいまでの記憶がありません。そんな私の幼稚園のあいまいな記憶に古町通の茶の香りがあります。古町十字路のバス停で降りて、古町通を通って幼稚園に通っていたらしいのです。多分、浅川園の茶の香りだったのでしょう。

その後、小・中は山ノ下からほぼ出なかったのですが、母と満蒙寿司で生ちらし寿司を食べた記憶があります。いなりやかんぴょう巻以外の寿司は初めてだったのかもしれない。高校の時、喫茶店にも映画館にも入ることなく、学校と家を往復するだけでした。

大学は五十嵐で、三年の時は週一度教育学部の講義を受けに西大畑にきました。昼食に友と食べた東華楼本店の野菜炒め定食と三日月のソフトクリームがおいしかったと記憶しています。五十嵐には学科の新歓コンパをする会場はなく、古町通の清水フーの二階で行うのが恒例でした。後輩がピンクレディーを踊ったの

を覚えています。どうも私の古町の記憶は飲み食いからみです。

今年文化庁の博物館クラスター形成支援事業を受託し、「新潟古町の記憶と魅力発信事業」が始まっています。その一つが「昭和の古町を掘りおこしてみよう」です。かつての地図や写真をみたり、町を歩いたりして、各々が古町の姿を思い出し、当時の暮らしのなかで、古町をどのように楽しんだのか整理しようという企画です。多くの人の記憶と想いを重ねることで、かつての町の魅力を明らかにし、今、古町に必要な魅力を探ることが目標です。

博物館も市民とともにまちづくりを参画することが求められる時代となっています。



多くの参加者が盛況だった7月15日のキックオフ講演会

収蔵資料紹介

佐渡汽船商事 津野務著 『一九六六』観光にいがた』

今年度、当館を事務局とし、文化庁博物館クラスター形成支援事業「新潟古町の記憶と魅力発信事業」を実施しています。企画のひとつに、古町がにぎわいを見せていた昭和三十年代以降の記憶と出来事を市民とともにたどる「昭和の古町を掘りおこしてみよう」を担当していることから、当時のみどころ、名店を紹介した観光パンフレットなどの資料を調べています。本資料は、昭和四十一(一九六六)年に発行されたもので、古町通をはじめとする中心市街地のお店を著者独自の目線で紹介しています。

「古町みである記」の頁では、古町通一番町から北に向かって通りを歩

き、表通りや裏手にある店を紹介するといった体で書かれており、現在も営業をしている洋食の老舗「キリン」(一番町)を手始めに、市内百貨店の草分けという「芳屋」(四番町)、レーシング・カーサーキットがあったという丸和会館(四番町)、榎谷小路に面し、待ち合わせスポットであった書店・北光社(六番町)など当時を知る人ならば懐かしく思い起こす名前が列挙されています。

本資料は、繁華街、歓楽街であった往年の中心市街地を明るく文面で教えてくれるガイドブックです。当館情報ライブラリーにて閲覧できます。

(渡邊久美子 学芸員)



観光にいがた

『観光にいがた』表紙